

独占インタビュー

# リッカルド・ムーティが語る 指揮とオーケストラ

オペラ・アカデミー、ウィーン・フィル、ケルビーニ管



— Exclusive interview — Riccardo Muti speaks about his conducting and his orchestra

ラヴェンナ音楽祭のイタリア・オペラ・アカデミーで、ヴェルディ《マクベス》を指導中のマエストロ、リッカルド・ムーティに、7月26日ラヴェンナのアリギーリ歌劇場の控室で単独インタビューを行った。伊和通訳は、在イタリア40年の声楽家・演出家で、「リッカルド・ムーティ自伝—はじめに音楽—それから言葉」（音楽之友社刊）他の翻訳者、田口道子さんが引き受けてくださった。感謝の意を表したい。

取材・文=三光 洋  
Text=Hiroshi Sanku

偉大なオペラ指揮者は、  
優れたシンフォニー指揮者

—今回はオペラ指揮者としてではなく、シンフォニー指揮者としての活動についてうかがいたいと思います。

「アルトゥーロ・トスカニーニ、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、オットー・クレンペラー、カール・ベーム、クレメンス・クラウス、フリッツ・ブッシュ、アルトゥール・ニキシュといった優れた指揮者は、いずれもオペラの指揮者としてデビューし、それから後になってシンフォニー指揮者になっています。中にはオペラと交響楽を同時にスタートさせた人もいます。優れたオペラ指揮者はシンフォニー指揮者としても優れています。」





ラヴェンナのオペラアカデミーでは自らピアノも弾いた（右から）

しかし、シンフォニー指揮者がいいオペラの指揮ができるとは限りません。なぜなら、オペラ指揮者にはドラマの感覚が必須だからです。劇場感覚があるか、ないかは生まれつきの能力です。例えば、ユージン・オーマンディ、セルジュ・チエリビダツケといった指揮者は、シンフォニー指揮者でオペラ指揮者ではありません。一方、偉大なオペラ指揮者は、ほぼ例外なく優れたシンフォニー指揮者なのです。

モーツァルトのような作曲家は、交響楽にも劇場的な要素がよく入っています。偉大なピアノリストであるスヴァトスラフ・リヒテルのような人は、若い時に

オペラの伴奏ピアノリストとしてスタートしています。リヒテルはイタリア、ドイツ、ロシアのオペラを自家楽団中の物としていました。オペラに通じていることは、オーケストラにとっても大きな利点となっています。例えば、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団は、私見では世界最高のシンフォニー・オーケストラですが、毎晩のようにウィーン国立歌劇場のオーケストラ・ピットに入ってオペラ公演に参加しています。交響曲しか演奏しないオーケストラと、オペラだけを演奏しているオーケストラは、いずれも演奏能力が限られています。一つの分野に留まっただけで、精神が開かれていないのです。音楽の歴史は交響曲の歴史とオペラの歴史の双方から成り立っています。私はミラノ・スカラ座で50本ものオペラを指揮しましたが、キャリア全体から見るとシンフォニーの活動の方が大きいのです。フィレンツェ市立劇場とミラノ・スカラ座の音楽監督を務めたために、私のことをオペラ指揮者だと思っっている人が多いのです。

——2年前の夏、ザルツブルクでの共同記者会見で、初めてヘルベルト・フォン・カラヤンに呼ばれてザルツブルクを訪れた時、ベルンハルト・バウムガルトナーとすれ違ったことを振り返っておられましたね。

「1971年、祝祭大劇場でのことでした。バウムガルトナーは見上げるような巨人で、威厳に満ちあふれていました。その時、ザルツブルク音楽祭総裁で、また芸術監督だったカラヤンの師でもありました。当時の音楽祭には、綺麗な星のように傑出した音楽家が集まっていました。バウムガルトナー、カラヤン、ベーム、レナード・バーンスタイン、リヒテル、ダヴィッド・オイストラフ、ムステイスラフ・ロストロポヴィチといった人々で、今からすると別世界そのものでした。振り返ると、あのころは黄金時代だったのだと思わずにはいられません。今は、偉大な指揮者が出てくるのを待っている時代なのかもしれません」

### ウィーン・フィルとの48年間

——48年間、ずっとウィーン・フィルを指揮して、最も愛着のあるオーケストラなのは、特別な音を持った楽団だからでしょうかね。

「ウィーン・フィルと私との関係は他に例がないでしょう。48年連続というのは特別です。そのために、数世代にわたる楽団員と接することになりました。1971年、カラヤンに呼ばれて初めて指揮したときには、戦争を経験した団員もいたのです。その世代が引退して新しい人々が入団し、彼らもまた退団して、さらに新しい人々が入団してきています。その人たちでさえ、今日には白髪が増えてきています。ウィーン・フィルの定年は65歳です。1971年当時、指揮者の私がいちばん若かったので、団員たちを『教授』（プロフェッソリ）と呼んでいましたが、今は私が一番年配なので、冗



指揮の指導をするムーティ。ラヴェンナ音楽祭のアカデミーで ©Silvia Lelli

談で「私のバンビーニ（男の子たち）」と呼ぶこともあります。

——最初の年には、トスカニーニの指揮で演奏したことがあるチェロ奏者がいたそうですね。

「ええ、そうだったのです。フルトヴェングラーやブルーノ・ワルターを知っている団員がいました。奏者たちと私の相互に愛着と敬意があるのです。オーストリアからは数々の栄誉ある賞をいただきましたが、最も感激したのは、楽友協会がブラームス「交響曲第2番」を演奏した時、プログラムのブラームスの名前の下に「楽友協会名誉会員」とあり、私の名前の下にも同じ肩書があるのを見たときでした」

オーケストラには  
それぞれの国の音が

——5月17日に、パリのフランス国立管



弦楽団の定期演奏会で、ブラームス「ワ  
イオリン協奏曲」を指揮されましたね。  
このブラームスは深みのある濃密な音で  
したが、暗くはありませんでした。

「フランス国立管弦楽団には独自の音があるからでしょうね。日本のオーケストラでも暗い音にはならないのではないのでしょうか。私は、ブラームスは根本的にウィーンの音楽家だと思っています。彼の音楽はドイツ的というよりもウィーンふうでしょう。ブラームスがベートーヴェンだけでなく、シューベルトから大きな影響を受けていることを忘れてはいけません。重苦しい感じのブラームス演奏は間違った伝統でしょう。ベートーヴェンも重々しく「ファシスト的」に演奏するべきではないと考えています。第二次世界大戦の時に、ベートーヴェンやブルックナーの音楽が持つ音の潜在力をナチスが政治的に利用しようとした。その一方で、現在、音楽学の文献研究を取り入れて、「軽く」ベートーヴェンを演奏するのが流行していますが、私はこの両極端はいずれも適切でないと思っています。1930、1940、1950年代の演奏は音を極端に膨らませて重々しく「パバパバ」(と、「交響曲第5番(運命)」の出だしを重苦しい調子で歌う)とやっていました。しかし、楽譜を見るとそのように書かれていません。

またオーケストラにはそれぞれの国の音がありますから、フランス国立管にウィーン・フィルの音を要求しても意味はありません。ウィーン・フィルとサンクトペテルブルク・フィルハーモニー交響楽団も音は違うのです。ワーグナーの(指環)をフルトヴェングラーが指揮しても、



「ちょっと肩をこうして」。アカデミーでの指導風景。今年の3~4月、「東京・春・音楽祭」でもアカデミーを行う ©Silvia Lelli



ソリストの歌手にも指導するムッティ ©Silvia Lelli

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とローマ・イタリア放送交響楽団(現RAI国立交響楽団)とでは音はまったく違っています。解釈は同じでも音色は変わってきます。ドイツのオーケストラがヴェルディやペッリーニを演奏しているのを聴くと、私は「これは違うな」と思わざるを得ません。音が重く、そこには「イタリアニタ」(イタリアの情緒)の光がないのです。音色を越えて、文化が違うのです。ヴィヴァルディがイタリア人で、ブクステフーデがドイツ人なのと同じことです。

今は4つか5つのオーケストラとだけ仕事をしています。相互によくわかりあっているオーケストラだからです。日本だけは例外ですけれどね。

### 約600名の若い音楽家たちが 築立ったケルビーニ管

——いま最も力を入れているのが、ルイジ・ケルビーニ・ジョヴァニーレ管弦楽団ですね。5月に、カタラーニ、マスカリーニといった作曲家のインテルメッツォを並べたプログラムをバリで演奏されました。

「2004年に創設され、いままでに約600名の若い音楽家たちが築立ってきました。彼らはイタリアと欧州のオーケストラでよいポジションについています。一つだけ例を挙げるならば、バイエルン歌劇場管弦楽団のフルート・ソロは、ケルビーニ管の出身者です。パリ、ルクセンブルク、ジュネーヴのツアーで演奏したプログラムでは、オペラの間奏曲、マルトゥッチのような、知られていない作曲家の作品を取り上げました。

マルトゥッチはマラーも指揮しています。マラーはニューヨーク・フィルハーモニーの音楽監督だった1911年に最後のコンサートを行い、それからウィーンに戻って亡くなっています。最後の演奏会では、イタリアの作曲家の作品だけでプログラムを組んでいます。ブゾーニ、ボッシ(フルトヴェングラーも彼の作品を指揮しています)、シニガリア、マルトゥッチ、スガンパッティ(当初予定されていたが、当日は代わりにメンデルスゾーン「交響曲第4番(イタリア)」が演奏された)と、同時代のイタリア





ウィーン・フィルと私と48年連続とい  
う関係は特別です。数世代にわた  
る楽団員と接しました

ア人作曲家の作品を並べ、マーラーは、最後のコンサートをイタリアへのオマージュとして構成したのです。マーラーが彼らの作品に注目していたことをよく表しています。

このマーラーの最後の演奏会場にはトスカニーニが来ていました。このイタリア人作曲家たちはみなトスカニーニの友人だったのです。マーラーにとっては勇気のあるプログラミンクだったと思います。私はマーラーの記念年(2011年、没後100年)にシカゴ交響楽団と、誰もが取り上げるマーラーの交響曲ではなく、彼が最後に指揮したイタリア・プログラムをそのまま演奏したのです。

### ムーティが理想とする音

—5月のバリ公演で観客が驚いたのは、たった3年間しか在籍できないケルビーニ管の弦楽器が透明感にあふれ、管楽器には華やきがあって、これほど高水準のオーケストラがイタリアにある、ということでした。

「ええ、観客だけでなく批評も非常に高く評価してくれました。彼らは独自の音

を持っています。

—その音を形容するとしたら。

「ウィーンの音とイタリアの音とを燃り合わせた、私が理想とする音です。その理想の音が私の頭の中で鳴っているの、それを若い奏者たちに伝えたいと思、って彼らを指導しています。特にレガートの感覚を磨くことに留意しています。よく話していることですが、音楽はイタリア語と同様に、流れの絶えることのない川のようなものです。イタリア語は常にレガートで、言葉はイタリア人にとって、いちばん大事なものです」

### ■公演情報

#### リッカルド・ムーティ指揮シカゴ交響楽団 プログラムA

(日時)2019年1月30日19時(曲目)ブラームス  
「交響曲第1番」、同「第2番」

#### プログラムB

(日時)2019年2月3日14時(曲目)リムスキー  
=コルサコフ(シェエラザード)、チャイコフスキー「交響曲第5番」

#### ヴェルディ「レクイエム」

(日時)2019年1月31日19時/2月2日14時

(会場)すべて東京文化会館  
(問合せ)NBSチケットセンター03-3791-8888  
(9月29日発売開始)

### Information



リッカルド・ムーティ 著  
田口道子 訳  
音楽之友社  
本体2500円+税  
ISBN978-4-276-21798-0

リッカルド・ムーティ自伝  
はじめに音楽それから言葉



リッカルド・ムーティ 著  
田口道子 訳  
音楽之友社  
本体2500円+税  
ISBN978-4-276-20378-5

リッカルド・ムーティ、  
イタリアの心ヴェルディを語る